

## プロローグ

私の父は作曲家で母は声楽家だった。ただ戦後（昭和二十一年）生まれの私に物心が付き、小学校に上がる頃には、母はすでに声楽家としての活動を止めていたので、母の活躍ぶりは殆ど記憶に無い。父は、流行作曲家として揺るぎない地位を固めており、その活躍の舞台を、それまでのレコード歌謡、ラジオ放送劇からミュージカル、演劇に移した頃であった。だから父の代表的なヒット曲、戦前、戦中の「船頭可愛や」「愛国の花」「暁に祈る」「露宮の歌」「若鷺の歌」は勿論のこと、戦後の「とんがり帽子」「夢淡き東京」「イヨマンテの夜」「雨のオランダ坂」「長崎の鐘」「フランチェスカの鐘」「高原列車は行く」「君の名は」「黒百合の歌」などが巷で流行っていた当時の様子は、微かな記憶でしかない。

しかし「高原列車は行く」は音楽の教科書に載っていたし、修学旅行で北海道に行けば、バスガイドが「黒百合の歌」を歌っていた。「モスラの歌」は映画『モスラ』でザ・ピーナッツが歌うシーンを映画館で観たし、NHKテレビでスポーツ中継を観れば、「スポーツショー行進曲」が冒頭で流れる。ジャイアンツ・ファンとしては「巨人軍の歌（闘魂込めて）」を父が作曲した時は誇らしかった。そして東京オリンピック。

開会式で「オリンピック・マーチ」を聴き、いいマーチだなと思い、繰り返し繰り返しレコードで聴いた。若い頃で父のレコードを熱心に聴いたのは、この「オリンピック・マーチ」だけであった。

記憶に新しいヒット曲と言えば通称「六甲おろし」と呼ばれる歌だ。昭和十一年に「大阪タイガースの歌」として作られたこの曲は約五十年もの間、関西の熱狂的なファンの間では歌われていたが、全国的には無名で、父も殆どその存在を忘れていた。昭和六十年の阪神タイガースの優勝によって、この曲は一気に最も有名なプロ野球の球団歌となった。

けれども若い頃の私は父の偉大さを理解していなかったし、父の曲も私にとっては、ある意味で過去の音楽だった。少なくとも昭和三十年代に若者だった我々が熱中していた、今ではオールディーズと呼ばれる、エルヴィス・プレスリー、ポール・アンカ、ニール・セダカ、コニー・フランシスなどの曲とはかけ離れたものだった。父の曲は、聴けば良い曲だが、自分たちが歌ったり演奏したりするジャンルの歌ではないと思っていた。

父は平成元年に八十歳で他界した。そして私も歳をとり、今になって父の偉大さが分かってきた。

独学で作曲を学んだ父のことを人は天才と言う。

私にとつての天才とは、レオナルド・ダ・ヴィンチやモーツァルトやガロアやアインシュタインであつて、身近な父が天才だなどとは思つてもいなかった。

私だつて歌くらい作つた。子供の頃からピアノを習い、学生の頃はバンド活動に熱中していたから、フォークソングみたいな歌は作つていた。しかし残念ながら私には、逆立ちしたつて交響曲は書けない。

父は今で言う高校生頃に交響曲を作曲していた。楽器と言えばハーモニカくらいしか手許に無い状況で、本だけで和声理論や管弦楽法を学び、交響曲を作曲した。そんな父の凄さが分かつたのはごく最近のことだ。

けれども私が父のことを本に書くかうと思つたのは、そんな父の偉大さを喧伝しようと思つたからではない。父も普通の若者と同じく青春を過ごしていた。そして音楽に熱中し、母と文通し恋に落ちた。それも大恋愛であつた。

二十歳の青年と十八歳の乙女が、約四ヶ月の文通のみの交際で真剣に結婚まで考え、そして初めて会つたそのとき直ちに結婚した。

父と母が互いに交わした手紙は、優に百数十通にのぼると推定されるが、その内の四十通余りが今も私の手許に残つている。

その手紙を読むと、熱中していた音楽の勉強と恋愛の狭間、理想と現実との乖離に悩む青年と乙女の姿が浮かび上がつてきた。九十年前も今も変わらない若者の悩みだ。

そして文通が進むにつれて、友情はやがて恋心に、そして熱烈な恋愛へと発展してゆく心情は、ひしひしと私の胸の底を打つのがあった。

そんな普通の若者であった父と母の姿を知りたいと私は思った。

子供の頃からの本を書きたいという思いは、母の影響だ。

冒頭に書いたように、まだ私を産む前、母は声楽家だったが、一方で大の読書家だった。中年になってからは、金子光晴かねこみつはる主宰の詩の同人誌のメンバーとなり、詩の創作に没頭していた。

母は私がごく小さいとき、よく寝物語をしてくれた。母が聞かせてくれるお話が、本で読んだ話だと知るようになってから、私は本に興味を持つようになったと思う。母の話の源は、童話や小説は勿論のこととして、(当時流行の)『リーダーズ・ダイジェスト』や『文藝春秋』などの雑誌にも及んでいた。

そして字を読み書き出来るようになり、自分で本を読めるようになると、私は本漬けとなった。勿論近所の友達ともよく遊んだし、野球もし、ピアノのお稽古もあったが、今思い返すと、電車で通っていた学校の行き帰りも、家に帰ってから、寝るときも、いつも本を読んでいたように思う。読む本が切れたときは、家にあった雑誌、

『リーダーズ・ダイジェスト』に『文藝春秋』、『平凡』に『明星』まで読んでいた。

きっと父も同じように少年時代、音楽に熱中していたのだろう。母（私の祖母）から買ってもらった玩具のピアノに熱中し、レコードを買い込み、蓄音機で朝から晩まで、レコード盤が擦り切れるほど音楽を聴いていたに違いない。

やがて作曲にのめり込み、商業学校時代にはハーモニカバンドに入り、クラシックの名曲をハーモニカ合奏用にアレンジしたりして、卒業時には作曲家になることを決心していた。

しかし、父が最初に聴いたクラシックは誰の曲だったのか？ 人生を決めるほどの衝撃を受けた曲、或いは作曲家は誰だったのか？ リムスキー・コルサコフの「シエヘラザード」が好きだったのは知っている。ラヴェルの、それまでにない新しい音楽の響きに驚愕したのも知っている。しかし、それらがどれほどに父に影響を与えたのかは知らない。

個々の作品に対して、父がどんな思いで作曲していたのか？ 一番苦労した作品は何か。メロディーが浮かばずにどれだけ四苦八苦したか。満足しないままに仕上げてしまった曲はあるのか。

私は知らない。

あなたは自分の父親や母親のことをどれだけ知っているか？  
親の初恋を知っているか？ 親の心の奥底の感情を知っているか？

私は殆ど知らない。表面的に知っていることは沢山ある。古閑裕而こせきゆうじは有名人だったから、書き残した随筆やエッセーや自伝もある。しかし、何を想い、何を考えていたのかは殆ど知らない。

そして私は知らない。何故父は人生における最初の輝かしい栄光を自らは語らず、生涯わたに亘わたってそのことに触れようとしなかったのか？

知らないから私は考え、そして想像する。父と母は昭和五年（一九三〇年）一月二十三日の朝をどのように迎えたのかと……。

**君はるか  
古関裕而と金子の恋  
古関正裕・著**

発 行 : 集英社インターナショナル (発売: 集英社)  
定 価 : 本体 1,600 円 + 税  
発売日 : 2020 年 2 月 26 日  
I S B N : 978-4-7976-7376-0

ネット書店でのご予約・ご注文は[こちら](#)にどうぞ!